

イエイツの『最終詩集』と禪

本学助教 内 藤 史 朗

「僧侶の肩から落ちてしまった重荷を芸術が肩がわりしよう」としているときいたイエイツが、僧侶の荷を肩代わりした芸術家として、ウイリアム・モリスの名を挙げている。「彼（モリス）は目的を目指して自らが何をしているかを明確に知っていた。なぜなら、彼は数百年前に僧侶と神学者が怒って詩人と芸術家から奪い取った重荷を、詩人達が再び運び始める時に生きていたからである。……彼は、（ロセッティよりも）冷静で平静であったので、もし、それがわれわれと自然の事物の関係を平和状態にしなければ、そしてまた、それが常に少しは存在したし、いつの日か十分に存在するであろうということを、われわれが信じないならば、枯れてしまうような美を、われわれに示すからである。」（傍点筆者）

傍点箇所を示されるような美は、次の引用中の「不可見の生活」(the Unseen Life)に求めなければならない。

「英国では、全体性 (the perfect) から余りに長い間分離されていたので、社会が変革されるまでは、まるで変革され得ないような情熱を、周囲に見ていた、ウイリアム・モリスのような人達は、芸術を用と合致させることによって、もう一度、芸術を生活と結合しようとした。……だが、こゝアイルランドでは、芸術が

謙虚になった時には、芸術に二つの情熱、すなわち、不可見の生活の愛と、祖国愛の両方がそなわることになるだろう。」（傍点筆者）^⑤
「不可見の生活」はモリスの場合、社会主義的ユートピアであり傍点箇所からわかるように、それは、人間の全体性を回復するための理想であった。換言すれば、人間疎外の克服を目指す理想であった。モリスのユートピアや社会主義などについては、『ユートピアだより』や、最近、筆者の訳した『民衆のための芸術教育』（明治図書）を挙げるにとどめて、ここでは詳述しない。

注目してもらいたいのは、モリスの「不可見の生活」の完全な開花を、イエイツは美という語で表現したということである。イエイツはこのような美を、シェリーの影響によって、「知的美」(Intellectual Beauty)という語で表現する。この「知的美」について、ボーンスタイン (Bornschein) は『イエイツとシェリー』のなかでこう書いている。

「おそらく、イエイツは、“Intellect”を、シェリー等が使ったように、“divine mind”あるいは超感覚的英知の世界を意味する *noûs* の同義語として使ったのであろう。そうすれば、知的美は普通の物質性にあらわれる世界、すなわち、物質的一時的なものにあらわれる精神的永遠的な世界の美ということになるだろう。それゆえ、シェリーについてのエッセイで、イエイツは、“divine order”を“知的美”と同義語として用いていた。」^④

一時的なものにあらわれる永遠的なもの、物質的なものにあらわれる精神的なもの——そういう世界の美をイエイツは希求していたのであって、このような知的美は、地中深く掘れば何処で

も地下水に行きあたり、その水は、地表がどんな処でも、その地下に流れているように、一時的物質的世界の底にかくれているものと考えられた。そのような知的美は“divine order”の支配する世界であった。シェリーやイエイツにとって、この知的美と一体となることが自由の意味であった。ポーンスタインはこう述べている。

「シェリーの自由は、ゴドウィンゴドウィンはイギリス人の『政治的正義』の自由を超越し、知的美と一体になった。その美は、美、愛、智慧、自由を装って、人類の物質的精神的な全体的新生を招来することができるのであった。」^⑤

無政府主義の首唱者ゴドウィン(Godwin)は理性を信じて、法律などと妥協しなくても人間は個人的独立を保ちながら世界をうまくやって行けると考えた。したがって、圧制や専制から自由になって、財産の平等な社会になることは、新たな無制限の隷属を意味すると考えた。個人的独立としての自由を二つに分け、道德的独立は排し有害とした。もう一方の自然的独立を、理性と論証アキニョム以外のすべての拘束から解放された自由とし、有益とした。後者の場合、やはり理性と論証によって拘束されている。イエイツやシェリーの自由は、このような拘束をも超越するのである。なぜなら、あらゆる拘束を超越しなければ、「不可見の生活」すなわち彼岸における「知的美」や、それと一体になっている自由を追求することはできないからである。このような自由を追求するところに人間の全体性の回復を目指す変革向上があり、ここにイエイツはポイントをおいているといえよう。僧侶の肩代わりに芸術家

や詩人が背負うべき重荷とは、この全体性の回復を目指す人間の変革と向上のことである。これを新生(regeneration)と言ってもよい。

シェリーは「自由に寄せる歌」(Ode to Liberty)で、自由に対して智慧ソフィズムを導き出せと命じているが、イエイツはこれについて次のように述べている。

「自由は、明けの明星が海原から太陽を導いてくるように、人間の精神の最奥の洞穴から智慧を導き出すよう命ぜられる。」^⑥

人間精神の最奥の洞穴から、地下水につながっている智慧(したがって、「知的美」と関連があるのだが)を導き出すために自由が必要なのである。その自由をあたえるために禅が必要となったのであり、一九二七年に矢野龍渓教授から *Essays in Zen Buddhism* (1st Series) を贈られた時、その序文を読んだイエイツは心を捉えられたと言い切つてよいであろう。その序文は次のような文章からはじまっていた。

Zen in its essence is the art of seeing into the nature of one's own being, and it points the way from bondage to freedom. By making us drink right from the fountain of life, it liberates us from all the yokes under which we finite beings are usually suffering in this world. We can say that Zen liberates all the energies properly and naturally stored in each of us, which are in ordinary circumstances cramped and distorted so that they find no adequate channel for activity.^⑦

禅思想と自由が『最終詩集』において、どのように関連してあらわされているかを、詩「彫像」(The Statues)と「あめんぼ」(Long-legged Fly)に例をみてみよう。

「彫像」第三連の末尾から第四連にかけては、次のようである。

When gong and conch declare the hour to bless
Grimalkin crawls to Buddha's emptiness.

When Pearse summoned Cuchulain to his side,

What stalked through the Post Office? What intellect,
What calculation, number, measurement, replied?

‘Buddha's emptiness’は、「日本イエイツ協会会報」第四号および「大谷学報」五〇巻四号において、すでに拙稿を発表、論証したように、「仏陀の空」の意である。第四連の冒頭は、一九一六年四月の復活祭の蜂起の時の指導者ピアスが同志とともにダブリン中央郵便局にたてこもり、イギリス帝国主義鎮圧軍に包囲されながら抵抗した事件を謳っている。その時のピアスの心境は「仏陀の空」のようではなかったか。そう考えることによって、第三連と第四連は関連性をますのである。ピアスの心には、「仏陀の空」のように自由があったのではないか。これは、四連二行目の「何が郵便局のなかを闊歩していたか」の「闊歩する」‘stalk’という動詞に、「自由に闊歩する」イメージがみられるところから、論拠のある解釈であると思う。このように解釈すれば、イエイツがここで言いたかったのは、政治家としてのピアスではなく、アイルランド民族の心に自由を喚びましたピアスではなかったかと思われるのである。

イエイツに贈られ、その蔵書に残っていた『イースタン・ブデリスト』(一九二七八) Vol. IV, Numbers 3 & 4のなかで述べられているように、‘things are empty in nature’であり、‘the world is nothing but mind’^③とすることによって、はじめピアスのように死中に生を求め、生中に死を求め得るのである。エドワード・マリンズが、「イエイツは、復活祭の蜂起を、……死の瞬間にすべての限界を超越し、[自らが完成されたのを知った英雄達の仕業と見ていた]と書いているが、イエイツに贈られた大拙の著作論文からイエイツが菩薩のことを知っていたのなら、(大いに可能性があるのだが)、ピアスを菩薩とみなしていたことも考えられる。

なお、「一九一六年の復活祭」という詩で「おそろしい美が生まれた」とイエイツは謳ったが、この「おそろしい美」も現世すなわち此岸の美ではなく、彼岸のものである。そのような理想の美は、「美、愛、智慧、自由の装いをして」とあったように、人間の能力を最高に發揮するための自由への願望を喚起する。詩「あめんぼ」にて、シーザー、ヘレン、ミケランジェロの最善の境地を謳っているが、ここでは、シーザーの場合だけを挙げておく。

Our master Caesar is in the tent

Where the maps are spread,

His eyes fixed upon nothing,

A hand under his head.

Like a long-legged fly upon the stream

His mind moves upon silence.

ここには、禪の無心と一致するシーザーの境地がみられる。この無心の境地にあって、シーザーは最高の能力を発揮できたのである。無心の境地は今まで述べて来た自由の境地である。禪と符合するものを比較的初期からイエイツは希求していて、禪を大拙の書によって知ってから、その影響を受けたことは、十分理由のあることである。

〈注〉

- ① Yeats : *Essays and Introductions* (Macmillan) p. 193
- ② *Ibid.*, p. 64
- ③ *Ibid.*, p. 204
- ④ G. Bornstein : *Yeats & Shelley* (University of Chicago Press) p. 45
- ⑤ *Ibid.*, p. 47
- ⑥ Yeats : *op. cit.*, p. 88
- ⑦ Daisetz Suzuki : *Essays in Zen Buddhism* (Luzac & Co.) p. 1
- ⑧ *The Eastern Buddhist*, Vol. IV, October, 1927—March, 1928 Numbers 3 & 4, p. 204
- ⑨ *Ibid.*, Vol. VI, June, 1933, Number 2, p. 113

華嚴の性起について

本学助教授 鍵 主 良 敬

一

華嚴の性起という題を出すことによって、今、私が考えてみたいと思っている主題は、性起といわれる思想とは如何なるものであるか、あるいはそれを通してみた華嚴教学の問題点は何なのかということである。ところで、華嚴の性起として題は出されているが、性起といえば、華嚴教学の特質を現わす最も独自の思想であって、他の教学ではいられないものである。したがって、華嚴という言葉は付ける必要はないのであるが、問題を明確にするためと、その思想が大局的には如何なる学に属するものであるかを端的に示すために、このような題にしたのである。

さて、性起という概念は、周知の如く、性という問題についていえば、天台教学に於いて性具という課題があるので、それに対して起といわれる。具に区別して起といわれるのである。具とは、所謂、諸法の実相というか現実の物の状態・あり方が現にどうであるかという点を明らかにした概念である。物の真のあり方が、現にどのような状態になっているかという点は、色々な観点から究明さるべきであるが、それを最も徹底したあり方にまで推し進めて、性という究極の概念にまで到り、根元的に本質的なあり方に於いてこの現実を窮め尽すのが、性具といわれる概念である。